「和田吉左衛門物語～新たな地を求めて～」

和田吉左衛門は、一八一八年小方村に生まれた。とても優しく元気な子で、友だちとよく野山や海や川で遊んでいた。また、村の誰からもかわいがられ、すくすくと育っていった。

ところが、吉左衛門が二七才になったある日、大変なことが小方村に起きた。大竹に大雨がふり、大こう水が小方村をおそったのである。この大こう水によって、小方村のいい谷では全ての家が流されるなどのひ害にあい、また、田や畑は二度と作物を育てることさえできなくなってしまった。村人たちは、生活することができなくなり、とほうにくれていた。

吉左衛門は、かわりはてた小方村の様子を見て、なみだを流し、その場にたちすくんだ。

しかし、「何とかしなければ。」と思い、どうすればよいかと考えた末、海に新しく土地を作る「干拓（かんたく）」という方法を思いついた。干拓をして、新たな田や畑を作り、村人たちに分け与えることができれば、村人たちはいつまでも幸せにくらせると考えたのである。

しかし、干拓には、多くのひ用が必要である。けれども、今の小方村の様子では、村人からお金を集めることなどとうていできない。そこで、吉左衛門は、自分の家にある物を売ってお金にしたり、借金をしたりしてまで、干拓に必ようなひ用を準びした。

こうして、ついに干拓工事が始まった。この工事には、小方村の村人など、千人をこす人々が参加し、一生けん命に工事にはげんでいった。

ところが、工事開始から一年たったある日、もうれつな台風が大竹をおそった。大雨がふり、強い風が吹きあれ、吉左衛門たちが干拓工事をしている場所に、海からの大きな波が、何度もおしよせた。吉左衛門や村人たちは、台風が通り過ぎるまでの間、心の底から工事の無事をねがうばかりであった…。

次の日、ようやく台風が過ぎ去った。しかし、まだ風は強く、小雨が降り続いている。そんななか、吉左衛門や村人は、大急ぎで工事場所へと走った。そして次の瞬間、吉左衛門たちは、

「あっ。」

と、声を上げ、その場にしゃがみこんでしまった。台風により、無ざんにもていぼうがこわされ、これまで一生けん命にがんばってきた工事が台無しになってしまっていたのである。

吉左衛門は、うなだれ、頭を抱え込んだ。

「これまでの苦労は、一体何だったんだ。全てが台無しになってしまった…。

ここで工事を中止にすべきなのだろうか、それとも工事を続けるべきなのだろうか。」
そんな思いが、吉左衛門の頭の中をかけめぐる。その時、吉左衛門の耳に
「これでもう、小方村は、おしまいじゃ。」
と、力なくつぶやく村人の声が聞こえてきた。村人のつぶやきが吉左衛門の心の中で、何度も何度もこだまする。
吉左衛門は、拳をぎゅっと強く握りしめた。
「私は、必ず、この工事を成功させるのだ。」
こうして、干拓工事は、再開された。村人たちも、吉左衛門の思いにこたえようと、これまで以上に必死になってがんばった。
そして、工事開始から、六年たった一八五二年。
ついに吉左衛門や村人たちの思いがこめられた干拓工事が終了した。吉左衛門や小方村の人々は、その完成を手を取り合って喜んだ。
その後、村人たちは新しくできた土地へと移り住み、いつまでも幸せにくらした。

そして、吉左衛門がこの世を去ってから、百五十年以上たった今も、私たちは吉左衛門や村人たちの気持ちがこもった土地の上でくらしている。
私たちが、毎日のように勉強したり、友たちと遊んだりしている小方小学校の土地も、実は、吉左衛門たちの手によってつくられたものである。
吉左衛門がこの世を去ってから二年後、大竹に住む村人たちが、和田吉左衛門に感謝の気持ちを込めて石碑を建てた。
これが、小方小学校の前にある「楓園和田翁之碑（ふうえんわだおうのひ）」である。